

## ゼロリスク

2020. 7. 1

私たちは、感染症の専門家ではない。私たち素人には、日々様々な情報が入ってくるが、あまりにもわからないことが多い。そもそも、私たちは「新型コロナウイルス」なるものを、具体的には全く知覚できていない。見たこともないし、見るすべもない。まさに「見えない敵」である。

「PCR検査」というのも、つい数ヶ月前まで、私たちは全くその言葉を知らなかった。PCRというのは、Polymerase Chain Reaction の略称で「ポリメラーゼ連鎖反応」と日本語に訳される。英文を見ても何のことか分からないし、日本語に訳したところで、やっぱり分からない。

PCR検査の対象を濃厚接触者全員にまで広げた結果、従来なら気づかなかった可能性が高い感染者も顕在化したと言われている。私たちが全く知覚できないところに、ウイルスは潜んでいる。電子顕微鏡で観察された画像にしる、PCR検査にしる、私たちの耳目に幾度と触れているはずのものであっても、私たちは実のところ、それが何なのか、全くと言っていいほど理解も知覚もできていない。未知のウイルスについて、私たちはただ、感染症専門医の言葉を待つことしかできない。

リスクマネジメントの国際規格では、リスクとは「諸問題に対する不確かさの影響」とシンプルに定義されている。道路を歩くときに、目をつぶれば不確実性が大きくなり、これを「リスクが高まる」と表現する。不確実性とは、リスクそのものであると言ってもよい。未知の新型コロナウイルスは、その意味で、極めてリスクが大きい。

だが、重要なのは仮にリスクが大きいとしても、ゼロリスク（絶対安全）を目指す必要はないということである。私たちの日常は、リスクにあふれている。目をつぶって歩けばリスクは高まるけれども、目を開けていたとしても、10歩進む間に絶対に転ばないという保証はない。だからといって、歩くことをやめることはしないだろう。

リスクというものは回避すべきものであるけれども、一方で、受け入れるべきものでもある。私たちは、実にたくさんのリスクを受け入れることを通して、今を生きている。リスク関連の入門書を読むと、必ずと言っていいほど、「ゼロリスクはあり得ない」ことが明記されている。リスクは「回避」の裏側に「受容」があることを理解しなければならない。

懇談会の提言には、「学校における感染リスクをゼロにするという前提に立つ限り、学校に子供が通うことは困難であり、このような状態が長期間続けば、子供の学びの保障や心身の健康などに関して深刻な問題が生じる」ことが、下線付きで強調されている。

新型コロナウイルスは、不確実なことが多く、リスクは決して低くはない。だが、その他にも様々なリスクがある。それらを包括的に捉えながら、新型コロナウイルス感染症を回避しつつも、それを受容しなければならない。

「リスクは付き物」と言うと、諦めの態度を表現しているようにも思えるが、そうではない。「ゼロリスク」でもなければ「リスクは付き物」でもない。ゼロか100ではなく、リスク回避を目指しつつも、様々なリスクをてんびんに掛けながら、どこかで受容の境界を設定しなければならない。不断に考えていく営みこそが、リスク対策である。

今日から7月である。学校が再開され、今のところは、学校の新しい生活様式における“通常”を維持できている。今後、本格的な夏を迎え、また新たなフェーズ（段階・局面）へと進むことが想定される。それに伴って、「受容」の境界が変わることになるだろう。